

# 関西

の

## 演奏会

●モーツァルト室内管弦楽団（第12回）

関西で地道な活動を続ける門良一率いるモーツァルト室内管弦楽団が、没後200年の掉尾を飾るべく、ハイドンのオラトリオ《四季》を取り上げた。ハイドンのすべてが集約されたとも言うべき畢生の傑作だが、少々長めの作品だけに通常のコンサートで取り上げられることはめったにない。それだけにこのコンビのハイドンに対する気迫が伝わる。この作品には、ハイドンの心からの人間賛歌が、緻密な構成や豊かな情感表出、生き生きと躍動する音楽で見事に描かれるが、門良一の、何よりも適切なテンポ設定と過不足のないバランスの取れた解釈を、オケ、合唱団が真摯かつ生き生きと表現し、ハイドンの音楽に盛られた精神的愉悅をたっぷりと味わわせてくれた。透明感に満ちた伸びやかな声でハンネを清楚に歌い上げた木村能里子、余裕のある豊かな表現力で、この分野でなお第一人者である実力を示した西垣俊朗、艶やかな美声と恰幅の大きな表現を堪能させてくれた田中勉の3人のソリストも好演。その名を冠するモーツァルトと共にハイドン演奏にも大きな情熱を注いできたこの団体の総決算的意味を示す好演だった。（12月13日・いずみホール）